

◆旧大乘院庭園の調査 ― 第300次

1. はじめに

本調査は(財)日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乘院庭園保存修理事業」の一環として行った。平成10年度は北岸西半部を対象とし約200m²を発掘した。池の東北隅部にも別にトレンチ2本を設定し、護岸復原整備の資料とした(図64)。

主調査区の8m東に設けた昨年度の北岸中央部調査区では中世期以前に遡る北岸は、現汀線の12m北の位置(X=-146,906.0m付近)で確認された。今回はその西延長ラインと北西隅部の確認を主たる目的としている。

2. 調査区の現状と江戸時代の絵図

調査区の現状は昨年度の北岸中央部調査区付近から池北西隅に向けて、北に入り込んだ形をなし、岸の斜面は急勾配で立ち上がっている。汀には護岸石もなく、草付きの斜面となっており、水面と北岸肩との比高は調査区西端で約2m、東端では約4mあった。

江戸時代の絵図のうち庭園の様相がわかるのは大乘院門主であった隆温大僧正(1811~75)が描いた絵図であ

る。絵図は写しを含めて現在3種が伝わるが、このうち最も詳細なのが、写しではあるが奈良ホテル所蔵のものである(図65)。この図によると池北西部には石積の護岸があり、護岸は中央部で開口している。開口部の奥は舟溜まりとなり、脇には草葺きの舟小屋もある。開口部上には屋根つきの橋がかかり、御殿のある屋敷地区と北側丘陵地の寺社地区とを境していたようだ。

3. 岸北西部と池底の遺構

岸と池底の遺構は少ないところで1期、多いところで3期確認できた。古い方から第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期として概要を記す。

第Ⅰ期の遺構 地山面からなる岸と池底である。地山が露出している池底は調査区中央部から南にかけての範囲で面的に検出している。地山は灰色砂礫層であり、今回の調査区内での池底の高さは標高89.2~4mであった。地山の岸は発掘区北東隅で行った北壁と東壁の断ち割り確認している。東から西へつづく北岸が北へ入り込む角の部分である。角部分の北岸が40度前後の急勾配で立ち上がっているのに対して、東岸は15度ほどの緩やかな

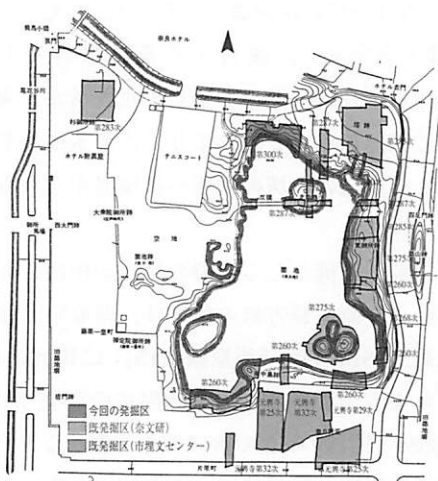


図64 第300次調査位置図 1:3000

図65 大乘院庭園四季写真図(部分、奈良ホテル蔵)

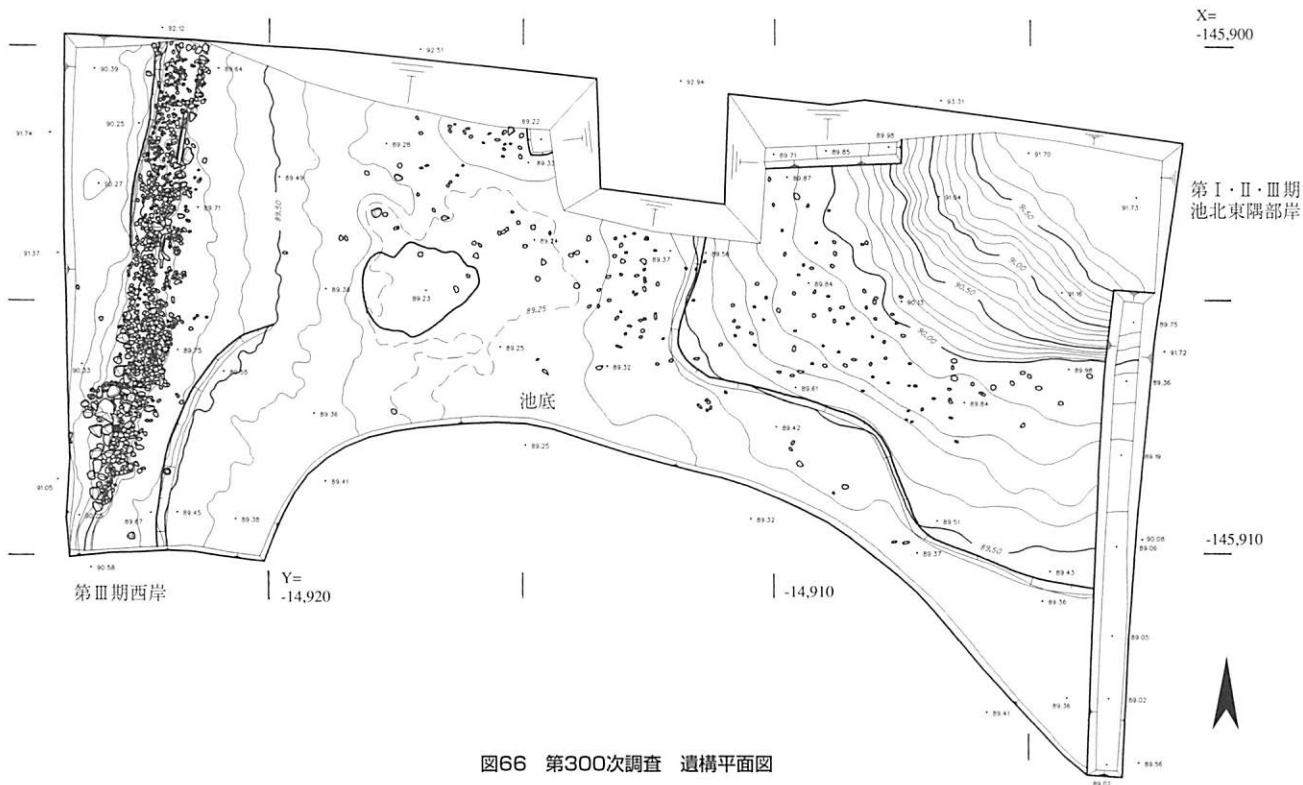


図66 第300次調査 遺構平面図

勾配である。立ち上がりの天端はほぼ平坦であり、その高さは91.0m弱である。入り込み部の北岸と西岸は調査区外となり確認できなかった。

第Ⅱ期の遺構 第Ⅱ期の面は調査区北東隅部と西岸の盛土断面で確認した。地山上に積まれた盛土は灰褐～黄褐色砂質土がそれぞれ5～20cmの厚さで6～8層積み重なり、これを時間的な差と見るか、工程差と見るかで時期の認識は変わるのだが、ここではこれを基本的に工程差と考え、池底の堆積層との連続性から分かれる2時期にのみ区分した。つまり、盛土下半部が第Ⅱ期の遺構であり、厚さは全体で0.6～1.0mである。立ち上がりの勾配は地山よりきつい。北岸は垂直に近く、東岸も平均すると30度前後となる。西岸の勾配は第Ⅲ期の護岸の掘り込みで切られており確認できない。

第Ⅲ期の遺構 明治末期に園池北側の丘陵地に奈良ホテルが開業するが、この敷地造成として丘陵を削り、池の埋め立てが行われた。第Ⅲ期はこの埋め立てで生じた池底と岸である。調査区北東隅の岸は第Ⅱ期の盛土上に斜面部で40～60cm、岸上部で20～40cmの厚さに砂質土を積み、築成される。岸の勾配は北岸、東岸ともに45度ほどの斜面に変わる。北に入り込んだ部分の西岸はしがらみと礫を用いた護岸となり、現池西岸の2mほど内側の位置にある。護岸は最下部に径約15cmの丸太胴木を岸に平行に据え、上に径5～10cmの礫を厚さ30cm前後、幅1mほどの範囲に傾斜をもたせて敷く。護岸の前面は高さ30cmほどのしがらみで土留めしていたようだ。この時の西岸肩は標高約91.0mであり、第Ⅰ期の地山面がなす岸と同じ高さとなっている。岸近くの池底は地山上に砂礫

土があり、これを最末期の池堆積土である黒色腐植土が覆う。池の中央部寄りには砂礫層からなる池底地山面を最末期の腐植土が直接覆っている。

4. 遺物

池底堆積土などから瓦、土器などが多数出土した。

瓦は軒瓦が30点、他の瓦が約1,500点である。軒瓦は奈良時代の東大寺式軒丸瓦が調査区北壁の断割で1点、平安時代1点、中世7点出土した。残りは近世のもので、これらは大半が明治期に埋まる時点での池底の遺物である。問題は第Ⅰ期と第Ⅱ期の年代を決める遺物である。1点のみの出土なので明確ではないが、第Ⅱ期の西岸の盛土中から中世期に入ると考えられる巴文の軒丸瓦があり、他には新しい遺物が出ていないことから、第Ⅱ期の岸は中世期に遡る可能性がある。

5. まとめ

今回の調査で北岸が北に入り込む部分を検出した。この様子は奈良ホテル蔵の絵図に画かれた舟溜まりにつづく入り込み部の形態と合致する。護岸石がなく草付きの斜面であったことも同様である。ただし今回の調査では絵図にある石垣は検出できなかった。絵図のとおりであれば調査区のすぐ北に石垣があるものと思われる。

しがらみと礫で護岸された第Ⅲ期の西岸は絵図では死角となっており確認できない。第Ⅱ期が中世に遡る可能性が確認できたが、軒瓦1点による推定であり、第Ⅱ期の年代観については今後さらに情報が増えることを願う。第Ⅰ期の年代は、本調査では中世期以前としか言えない。(高瀬要一)